



ドーラ・M・カルフ夫人

# サンド・プレイ・テクニク (箱庭療法) について ②

秋山達子

前回はサンド・プレイ・テクニク(箱庭療法)のやり方について大体のことを述べましたので、今回はこの療法の歴史について少し述べたいと思います。

サンド・プレイは英国のローヴェンフェルト夫人によって一九二九年に考案されたものですが、ローヴェンフェルト夫人はこれ以外にも色タイルを使ったモザイク・テス

トも考案された英国ではよく知られている心理療法家で、現在でもロンドンで高齢にもかかわらず活躍されています。

サンド・プレイはその後も世界テストや情景テスト、また村テストなどとともに一部の人たちの間で用いられてきましたが、これにユング心理学を導入して新しい解釈を下し、心理療法の一つとして現在用いられている形を確立したのは、スイスのドーラ・M・カルフ夫人です。たまたまこの月にカルフ夫人は日本に來られて、東京と京都で一般にセミナーを公開されましたので、ここでは主としてカルフ夫人を中心にこの療法についてご紹介しましょう。

カルフ夫人はスイスで生まれましたが、オランダ人と結婚して二児をもうけ、第一次大戦でご主人を亡くされるまではずっとオランダに住んで普通の家庭生活を送っていられた方です。未亡人になられてからまだ幼い二児をかかえてスイスに戻りましたが、それから彼女の勉強と生活への苦闘が

はじまりました。

カルフ夫人の最大の関心事はどうして幼くして父親を失った二人の息子を無事に育て上げていくことができようかということでした。そこから児童心理学を学ぶ熱意が生まれ、現在国際的に臨床心理療法家として知られるカルフ夫人が生まれたのです。

ある時C・G・ユングの一家が避暑地でカルフ夫人に出会いましたが、ユングの子どもたちが彼女のところに遊びにいった後は、いつも満ち足りて楽し気なようすをしているのにユングが気づいて、カルフ夫人に『あなたは将来児童の心理療法家になれるとよいでしょう』とすすめたというエピソードは有名です。

こうしてカルフ夫人は児童の心理に興味を持つようになったのですが、二人の息子が幼かった頃は、カルフ夫人の関心も児童の心理にだけ限られていました。しかし子どもたちが成長するにつれ、同年輩の青年たちの相談にも乗るようになりました。今

では上の息子のベーターは大学を卒業して世界の各国を仕事でまわって歩くようになり、下の息子のマルティンはチューリヒ大学の神学部在籍して宗教学を学ぶようになり、最近では児童の他にも若い社会人や、特に大学生の問題を多く扱っておられます。このようにカルフ夫人の療法は彼女の人生とともに、また子どもたちの成長とともに発展してきたものであり、ここに私たちは全く実際の具体的な生活上の問題に徹した一人の臨床心理家のあり方を見ることができましよう。そしてその経歴から考えても当然のことですが、カルフ夫人の理論は母と子の問題、親子の一体観の上に築きあげられています。

カルフ夫人はユング心理学や東洋学に大きな関心を示していましたが、創立当初のユング研究所で講義を聞いたり、またエンマ・ユング（ユング夫人）に直接指導を受けたりしながら深層心理学の造詣を深めていきました。また子どもをかかえて忙しい

毎日の中で英国にも出かけてアンナ・フロイトやローヴェンフェルトの教えも受けました。そしてこのローヴェンフェルトのサンド・ブレイ・テクニク（箱庭療法）に使う砂箱や人形も、他の遊戯の道具といっしょにカルフ夫人の小さな遊戯室の中におかれたのですが、子どもたちが特にこれを好んでよく遊ぶことから、だんだんとこの方法に注目するようになったのです。子どもたちはこの砂箱の中に円や角の図形を指で描いたり、人形で形づくったりしました。またある時は三歳の子どもがカルフ夫人に『もし地球が本当に丸いんだとすると、神さまは世界中の人を見ていられるんだから、神さまってきつと丸いものにちがいないね』などといったりました。

このようにしてカルフ夫人は、無意識は神話的な主題を持ったイメージとなってあらわれ、特に幾何学的な円や角の図型は世界の種々異なる文化圏において神や神聖なもの表現に用いられている、というユン

グの理論を子どもたちの遊びや言動の中に確認していったのです。

ここで、彼女が今までに扱った多くの事例の発表の許可をいただきましたので、その中から特に現在日本で問題となっている『学校恐怖症』の子どもの事例を借りて、その過程を追いながら、カルフ夫人がサン・ブレイ・テクニク（箱庭療法）のことでこれらの象徴の表現を見出していった跡をたどって、具体的にこの療法について説明を加えたいと思います。

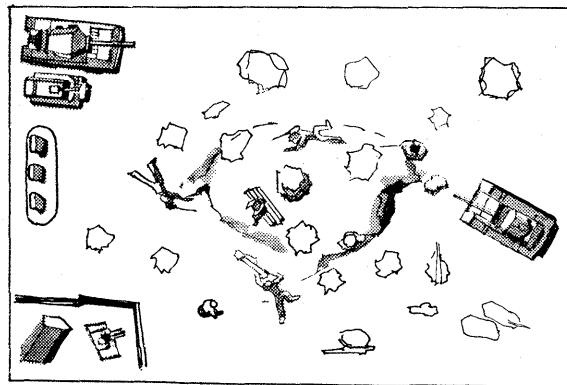
九歳になるクリストフという男の子の例です。彼はチューリヒ近郊の農家の子どもで二歳下の弟と二人で原や畑にかこまれた静かな環境に育ちました。学校に行くようになってから、毎日時間通りに家を出て、午後には予定通りに帰ってくるので家の人は少しも気づかずになっていたのですが、学校の先生からの注意で、最近はずる休みをつづけていることがわかり、父親が驚いてカル

フ夫人のところに相談にみえたのです。

クリストフは神経質そうに不安に満ちた表情をして父親の後に立っていました。カルフ夫人について遊戯室には喜んで入ってきました。

しかし玩具のビストルを見つめながら、『それで遊びたいの』と聞かれても、こわごわと首をかすかに横にふるような内気な子どもでした。カルフ夫人が『お砂遊びをしたことがあるの』と聞くと、『よくやったことがあるけれど、僕はもう大きくなったからやらないよ。弟が今よく遊んでいるけれど』ということなので、カルフ夫人は『でもお砂の上に玩具をおいて遊んだことはあるかしら』といいながらたくさんの玩具の車や動物や人形を指してみせました。クリストフはこの考えが気に入ったようです、早速砂箱の遊びにとりかかりました。はじめに砂箱の真中に大きな丘ができました、そして向こう側がよく見通せるようになるまで注意深くそこにトンネルを掘り

図一



ました。それから玩具をながめて、家とブランコをえらびブランコの上に男の子を乗せて、砂箱の左下隅におき、柵でまわりをしつかりかこみました。次に丘の頂上に高いボプラの木を置いて、その下にベンチをすえ、もう一人の男の子をすわらせまし

た。そこから丘の麓に向かって細い道指  
でつけました。それから突然気分を変えて  
あたりを激しく見まわし、タンクや兵隊や  
武器をたくさんとりだして、丘のまわりに  
散開させ、戦争がはじまったのだと宣言し  
ました。兵隊たちは丘をとりかこみ、トン  
ネルを通して機関銃が打たれ、タンクが出  
動しました。さらに彼は空からも攻撃する  
ように丘の真上に爆撃機を糸でつるすこと  
まで考えました。

遊戯室に入ってきた時はあんなに内気そ  
うだったクリストフは、砂箱の遊びにすっ  
かり夢中になって、最後に爆撃機が正確に  
丘の真上につるされるまで我を忘れて遊ん  
でいましたが、やがてやっと満足したよう  
に全体を眺めて、最後にまた急に思いつい  
たように左のはじめにガソリン・スタンドを  
おいて部屋を出て行き、父親に向かって誇  
らし気にその作品を見られるようにと告  
げました。(図(一)参照)

この砂箱の柵にかこまれた左下隅は、家

やブランコのある平和な家庭の情景で、彼  
の落着いていられる唯一の場所なのでしょ  
う。そして中央の木の下にいるもう一人の  
男の子は外の世界を見下ろしている彼自身  
のことでしょ。木は世界の多くの神話や  
お伽話の中で生命の木と呼ばれて、大地に  
根をはって空に向かってすくすくと生長す  
るものであり、天と地を結ぶ統合を意味し  
て、創造力や独立心をあらわすものとされ  
ていますが、同時に木は花を咲かせて実を  
結んで人々に甘い果実を与え、その下に憩  
う人を保護し養う意味を持っています。こ  
の子どもは木の下で休みながらその保護の  
下に自分を育てて、いずれはポプラの木そ  
のもののようにすくすくと育っていくはず  
なのです。しかし麓では戦争がはじまっ  
て、丘は兵隊にとりかこまれ、空からは爆  
弾も落ちてきそうです。この砂箱の構図か  
ら見ると、外の世界は彼にとってまわり中  
敵にかこまれた恐しいところのようです。

だから彼は左下隅の家に閉じこもって柵を

開こうともせず、学校もしばしば休みがち  
になってしまふのです。カルフ夫人にはこ  
の丘がなんとなく妊娠中の母親のおなかの  
ようにも思えたので、何かその辺に問題が  
あるのではないかと、母親の話を聞いてみ  
ることにしました。

クリストフの母親は農家の娘でしたが、  
小さい時からすぐおなかが痛いといつてあ  
まり働かなかつたので皆からは怠けものと  
思われていました。この持病は結婚しても  
つづいて妊娠を不安に感ずるようになりま  
したが、医者にはどこが悪いのか理由が見  
出せませんでした。それで彼女は出産を非  
常に恐れていましたが、クリストフは安産  
でその点は問題ありませんでした。しかし  
彼女は出産の恐怖から、この生まれでた子  
どもをあまりかわいいとは思えず、よく面  
倒も見ませんでした。このような状況では  
もちろんクリストフが母親について安心感  
を持つこともできなかったでしょうし、ま  
た母親の持った恐怖感が無意識のうちに子

どもに伝わっているのであろうことも考えられました。

クリストフはこうして内気でひよわな子どもに育ちましたが、入学前にはヘルニアの手術をするようになり、その後は余計に神経質になって、夜は二階の部屋で一人で寝ることまでこわがるようになりました。

二年の時に受持ちが変わって厳しく粗暴な先生につくことになったこともこの傾向を強めて、時々学校を勝手に休むようになり、またこの頃から家の中で小さな盗みが始まって、特にあめとかチョコレートなどの甘いものを母親にかくれて持ち出すようになりました。クリストフが外の世界で勇氣を持って生きていくのには、甘くやさしい母親の保護を必要としていることは確かでした。

この砂箱の中のポプラの木の下にいる男の子は、そこに茂った葉で彼を保護してくれる象徴的な母親を求めていると同時に、外界の敵を恐れながらも、なんとかして育

つていこうとする生命力をもあらわしているように考えられ、その上、最後に左はじにおいたガソリン・スタンドは、無意識の中に貯えられているエネルギーの供給源を意味しているようで、カルフ夫人にはこの砂箱の構図は将来への希望を秘めたものように思えました。

その次の時は、はじめからクリストフは安心してカルフ夫人とお店屋さんごっこをしました。カルフ夫人が八百屋さんになつて、彼はオレンジをたくさん買いました。

オレンジは甘い果実と種子を持つ明るい色をした球形です。それは彼の無意識の中にも思えました。こんな遊びが繰り返されていたある日、彼は考えを変えて、お店に買物に行くかわりに襲撃をしました。カルフ夫人はおまわりさんになって、広い家中を隠れている彼を探して歩く役になりました。こうしてお買物遊びはかくれんぼに変わりりましたが、クリストフはきつと、無意

識の中に隠れていてまだ見出されていない本当の自分を見つけて欲しかったのかもしれませんが。また父親の絵を描くのだといって黒板に描かれた姿は、隅の方にちぢこまっている小さい人でした。これはまだ芽を出したばかりの彼自身の小さな自我をあらわしていたのかもしれない。

一ヵ月後に、再び砂箱の作品が作られましたが、今度はやはり中央の丘の上に男の子が休んでいましたけれども、その下に町ができました。しかし町は急に戦場に変わってしまつて大混乱となり、汽車や自動車は丘につきささつて脱線してしまいました。その後しばらくの間、クリストフは雷管のついた玩具のピストルに夢中になっていました。はじめは大きな音をこわがって部屋の隅で耳をふさぎながらカルフ夫人にピストルを打たせていましたが、そのうち自分でもやれるようになり、だんだん大きな音をさせたがるようになって、しまいは地下室に行つて石の床にむかつて数え切

れないほど何回も爆発音をこだまさせながら打ちまくりました。大きな音がすればするほど彼は嬉しそうです。

それから四ヶ月後にまた砂箱の作品ができましたが、今度は砂の上で何台もの車を動かして遊ぶだけで、特に作品ともいえないものでした。しかしカルフ夫人には心の一隅でやっとせきとめられていたエネルギーが動きはじめたように思われました。また黒板をいっぱい使ってスキーヤーが山を滑り降りるところの絵を描きました。そのまわりにおおぜいの人が見物していましたが、この画面からは、クリストフがいよいよ丘から降りて戦いの行なわれていた世界に直面しようとしているようで、彼の並ならぬ決心が感じられるようでした。

しかしスキーのシユプールはまだ浅く、弱々しい線で描かれていて、この子どもの出発にあたっては細心の注意と保護が必要と思われました。そこでカルフ夫人はその次の時間にはどんな発展があるだろうか

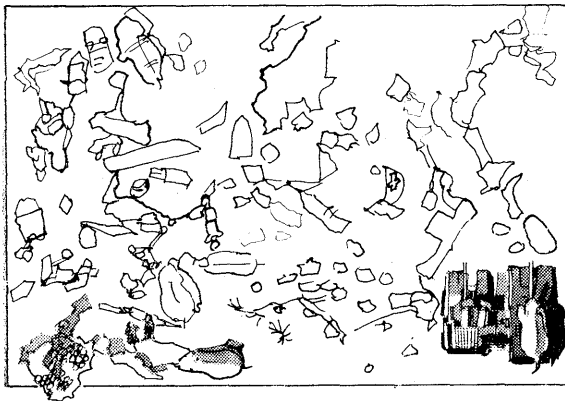
期待を持って待つことにしました。

一週間たち再びカルフ夫人を訪れたクリストフは青白な顔をしておびえた表情を浮べていました。一体この子に何が起きたのでしょうか。『どうしたの』というカルフ夫人の問いに、クリストフは『こわいことがあったの』といって少しづつ説明をはじめました。クリストフはカルフ夫人のところまで来るのに短い区間ですが汽車に乗るのです。その日来る時に郵便車に手紙の袋を運んでいた郵便屋さんが、汽車が動きはじめた時にステップから落ちてしまったのだそうです。大したこともなくて郵便屋さんは無事でしたが、こんな小さな事件でも育ちはじめたばかりの傷つきやすいクリストフの心に衝撃を与えるには十分でした。彼がすっかり混乱してもとの状態に戻ってしまったことは、まだ興奮がすっかりさめきらないうちに作りはじめた砂箱の構図にも、はっきりとあらわれていました。

クリストフはいろいろなものを無差別に

とり出して砂箱の中におきました。タンクも兵隊も家畜も猛獣もでたために砂箱の中にぎっしりと並べられ、その真中で汽車が転覆してしまいました。クリストフは『こんな世界には住みたくないな』とつけ加えましたが、これはまるで分裂病の人の作ったも

図二



のようでした。カルフ夫人はその中に何か希望の持てそうなものはないかと探しましたが、砂箱の左手の下に小さな池があり、子どもと一人の女性がこの混乱した情景に背を向けてすわっていました。傍には花の咲いた木があり、象が一匹池から水を飲んでいました。(図(二)参照)

クリストフはこの混乱した世界に背を向けてカルフ夫人との治療の場面と思われる静かな憩いの場面を作り、無意識の中の生命力の溢れる泉の傍に、生長の過程をあらわす花の咲く木をおき、重い荷を背負って人間の仕事を手伝う象も加えたのです。クリストフはこの大混乱から脱出する可能性を示す力の存在の憩いの場所を、何気なく砂箱の左下隅に作っていたのです。しかしまた外の混乱は当分の間つづきそうでした。

その頃受持ちの先生からクリストフが毎日学校に来られるようになったとの報告がありました。また他の子どもたちとはうまく遊ばず学業も遅れているので特殊学級

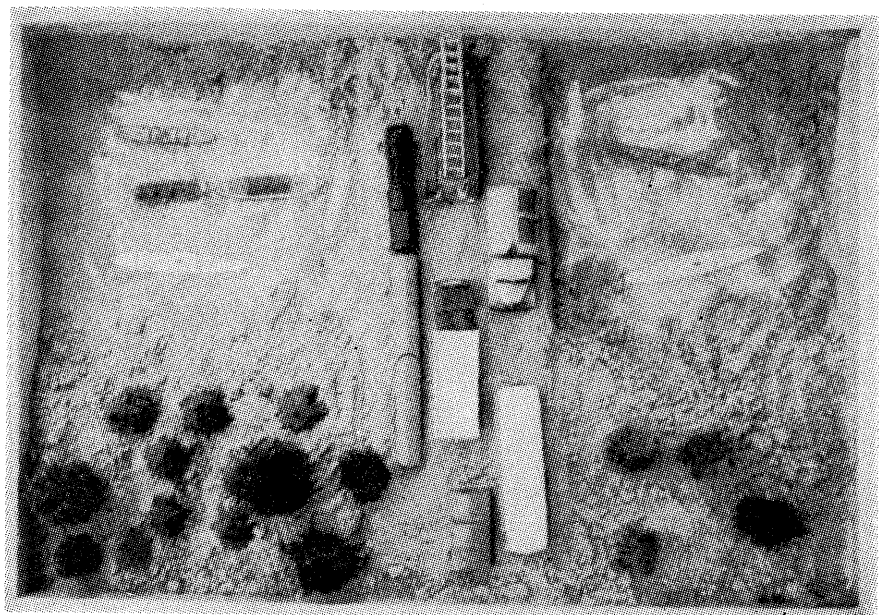
に入れるとのことでした。しかしカルフ夫人はやっと自信を持ちはじめた子どもの心が傷つくことを心配して、学級を変えることはもう少し待ってもらうようにと先生に頼みました。

その後しばらくの間、クリストフは壊れた電気機関車の修理に熱中していました。そして解体をしたり部品をとりかえたりしたりしていました。そのうちどうやら汽車が動くようになりました。カルフ夫人は電気のことによくわからなかったので、レールを組み立てて電気機関車を走らせる遊びでは、彼が主導権をとり、カルフ夫人は助手になりました。これはクリストフに自信を与えるのに大いに役立ったようです。ここで彼は自分が教えるという指導者としての役割を学びました。

五週間も熱心に汽車で遊んだ後で、カルフ夫人はまた砂箱で遊ぶことをすすめてみました。クリストフはすぐ賛成して、今度は大きな河の上にかかる橋と広い道路を作

りました。河には船が左右の両方向にすんでいました。橋の上には汽車や自動車が行き来してました。よく見ると手前の森の方から消防車とパトカーが向こうの火事や混乱を静めるために走って行きます。清掃車がゴミをかき集めて戻ってくるそうです。水上でも陸でも車や船が左右、上下に行き来して意識と無意識、外界と内界の間を結ぶつながりができてきたことがよくわかります。手前の森であらわされている無意識の暗い茂みの中から新しいエネルギーが現われ、健康な心の働きがはじまっていることをカルフ夫人は悟りました。(写真(一)参照)

今では電気のことについて詳しくなったクリストフにカルフ夫人は、お人形の家に豆電球をとりつける仕事を依頼しました。そして大変な努力の末に三階建のお人形の家には明りがつきました。家は心をあらわします、そしてその中に明りがともったのです。これを見た時のクリストフの喜



写真(一)

びは、エディソンが電灯を発明した時以上のものがあつたかもしれませんが、そしてこれがかつかけとなつて次の箱庭の作品には更に発展が見られました。

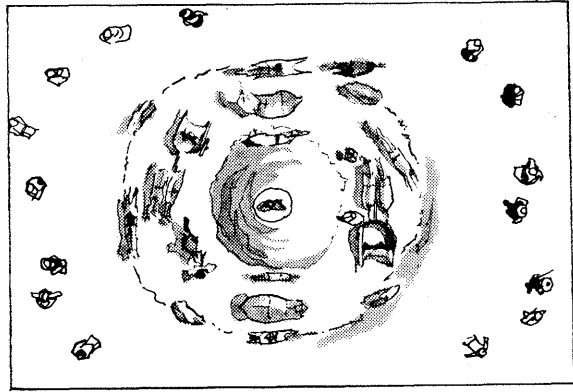
今度も砂箱の真中に小高い丘がありました。一人の人がすわつてハーモニカを吹いていました。そして丘の下には左右にまわるサーカスの情景が作られ、象や虎や馬や戦車を馳るローマ人や道化やアクロバットの人形がおかれて、観客は砂箱の両側にわかれて行儀よく見っていました。(図(三)参照)

サーカスはラテン語のチルクスからきた言葉で、もともとはギリシャで『輪』や『円』をあらわしていました。前回に橋と河で十字の図型を作った彼は、今度は音楽家を中心に円型に輪を描く図型に変わりました。カルフ夫人はこのような図型が砂箱の作品にあらわれてくることを、中心核の形成と呼んでいます。児童は普通、母親との未分化の世界から二、三歳頃までには自己の中心を形成してその上に自我を育てていくのですが、この砂箱の中の無邪気な遊びの中でクリストフが象徴的に表現しているものは、遅ればせながら自分の中心を見いだして、その上に健康な自我を育てて行くこうとする努力です。

こうしてクリストフは自己の成長の基盤を作りあげ、その後も砂箱や粘土の作品にその後の順調な成長の跡を残しながら育てていったのですが、あまり長くなるので、この事例の紹介はこの辺



図三



で終わりにいたします。

カルフ夫人は現在でもスイスのチューリヒ市の郊外のゾリコン村で、ヒンダーツューネンと呼ばれる十五世紀から建っているお伽話の中でも出てくるような古い家に

住んで、このような療法をつづけています。最近では、小さかった遊戯室も広げられて、世界の各国からこの療法を教わるためにお弟子さんたちが集まるようになりました。

この事例でもよくあらわれているようにサンド・ブレイ・テクニック(箱庭療法)が学校恐怖症や児童の情緒障害の治療にあげる効果は大きなものですが、それと同時にカルフ夫人の心理療法家としての真価は、母性愛にあふれる人格と子どもたちにさしのべる母性的な保護と励ましのある心にあると思います。カルフ夫人は一九六六年に、それまで扱われた多くの事例を集めて『ザンド・シュピール』(砂遊び)という本を書いてこの療法を世界に発表されましたが、この本は彼女の最愛の二人の息子ペーターとマルティンに捧げられたものです。外国のことはこの位にして、次回は日本におけるサンド・ブレイ・テクニック(箱庭療法)についてお話しします。

### お知らせ

これまで毎年六月に開いてきた「幼児教育実際指導研究会」は、時期が適当でないと考えた結果、六月に行なわないで、秋に行なうことにしました。秋に行なう「幼児教育実際指導研究会」の詳細については、きまり次第、追って本誌上に掲載します。

お茶の水女子大学附属幼稚園内  
幼児教育研究会

### 幼児教育講習会予告

日時 昭和45年7月22日(水)  
25日(土)

会場 お茶の水女子大学  
講堂・体育館

主催 お茶の水女子大学  
附属幼稚園内

日本幼稚園協会